

4 重点目標を達成するための今年度の取組と評価基準・評価結果

A 重点	C短期経営目標(年度末までにどのような状態にするか)	具体的な方策	具体的な取組		成果		自己評価				学校関係者による評価					
			評価	取組に関する指標 (可能な限り数値で)	評価	成果指標(可能な限り数値で)	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策	評価	主な意見		
							中間	年間	中間	年間						
1 知 (確かな学力)	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。学習したことがよくわかり楽しく学習している児童を90%以上とする。	一人一台タブレットと学習アプリMonoxerの活用による授業改善・授業改革の研究に取り組む。	A	他分科会とも協力し学校全体で取組んだ	A	児童の肯定的評価90%以上	C	B	B	A	全校90.4%(低学年93.1%、中学年90.2%、高学年86.8%) 児童が授業のほんの少しの時間、合間に個に応じた学習課題を設定する学習アプリMonoxerに取り組む様子や、他のICTツールを使った学習の様子を見ると、児童が自ら学習に向かう姿勢が格段に身に付き、学習に向かう喜びを感じていると考える。	学習の指導と評価、評価に基づく指導は教員が行うものである。個別の支援のためにエデュケーション・アシスタント等の人材を活用する。理解の定着のためにMonoxerを引き続き活用する。また、授業におけるICTの効果的な活用も引き続き研究する。	A7 B1	・ICTの活用に引き続き取り組んでほしい。 ・Monoxer活用に積極的に取り組んでいて充実している。全家庭が理解し全児童が活用、利用しきれるようにしたい。 ・児童が自ら学習に向かっている喜びを感じているのはとても良い。 ・タブレットが苦手な児童への支援を充実していきたい。		
			B	年間をとおして学年で取組んだ											B	児童の肯定的評価85%以上
			C	学年で協力・連携して取組んだ												
			D	十分な取組ができなかった												
		学習におけるICT機器・学習アプリの活用、学習状況の把握と適切な指導・支援を行う。	A	学年で適切な指導・支援を共有した	C	B	児童の肯定的評価80%以上									
			B	学習アプリを効果的に活用した				D							児童の肯定的評価75%以上	
			C	ICT機器を効果的に活用した												
			D	十分な取組ができなかった												
2 徳 (豊かな人間性)	自信のあるところとないところを含め、自分自身にだいたい満足している児童を80%以上とする。	良さに【気付く・見付ける・感じる】そして【伝える・認める・褒める】取組を年間をとおして、児童の自己評価を育て高める。	A	児童とともに日常的に取組んだ	A	児童の肯定的評価80%以上 6年生70%以上	C		B	B	A	(1)全校82.1%、6年生84.0%(17.0%増) 児童をよく見て、気付き、良さをフィードバックすることを教職員が意識すると児童の自己評価が高まることにつながる。委員会や学習における児童の自主的な活動が自己評価を高める要因とも考えられる。	2年生は中間88.0%から年度末80.8%となった。成長段階を踏まえつつ、良さをもっと感じられるよう下級生である1年生とのかかわり・共同学習の計画を増やしていく。	A7 B1		・80%以上の児童が自分自身にだいたい満足しているのは素晴らしいと思う。 ・自分の良さを問うことはなかなか無く、欠点だけを感じてしまいがちだが、この取組により自己評価をすることは良いと思う。 ・子供たちが自発的に学校を良くするために行動していると感じた。 ・地域への発信を充実したい。
			B	日常的に意識して取組んだ				B							児童の肯定的評価80%以上	
			C	学年で取組の仕方を共有した												
			D	十分な取組ができなかった												
		発達段階の理解、自己評価についての啓蒙、自己評価を高める具体的な事例など、学校だよりや学年・学級だより、ホームページなどあらゆる手段を使って家庭・地域と共有する。	A	学校だより・ホームページを活用して取組んだ	C	B	児童の肯定的評価75%以上									
			B	学級だよりや面談を活用して取組んだ				D	児童の肯定的評価70%以上							
			C	学年だよりを活用して取組んだ												
			D	十分な取組ができなかった												
	自分を大切に する児童を 95%以上とする。	互いを知り尊重し合うためのコミュニケーションや対話のスキルや能力を向上させる。	A	日常の授業や活動に取り入れて実施した	A	自分90%以上、友達95%以上	C			A	A	A	自分を大切にしている90.2%、友達を大切にしている97.9% 自分を大切にしている児童が増えている。2年生は、学校生活の中で少しずつ困り感が出てきている様子がうかがえる。	成長過程における2年生についての理解を深め、特別な支援が必要な児童だけでなく、全ての児童への支援を行っていく。 道徳について、授業の在り方を改善するとともに、二中校区で心の教育を中心として取り組むこととする。	A7 B1	・授業中、できる子が友達をサポートしている。校内の掲示物も他者とのかわり方についてよく掲示されており、とても良い環境だと思う。 ・道徳を通して他者とのコミュニケーションをとり、自己のスキル向上を図ってほしい。 ・挨拶できることは会話の始まりであり、友達への思いやりの気持ちにつながっている。 ・子供からの声をよく聞いて対応していることを続けてほしい。 ・ソーシャルスキルトレーニング(SST)の具体的な取組を紹介してほしい。
			B	SST等の取組を年3回以上行った				A'	自分85%以上、友達90%以上							
			C	SST等の取組を行った												
			D	十分な取組ができなかった												
		いじめ防止標語・ポスター作成、あいさつ運動などの児童活動を行い、いじめ防止を常に児童に意識付ける。	A	他教員と協同して100%対応した。常にいじめ防止を意識して取組んだ	B	自分80%以上、友達90%以上	A			A						
			B	アンケートや発生事案に100%対応した				B'	自分80%以上、友達85%以上							
			C	アンケートや発生事案に未対応があった												
			D	計画の未実施があった												
各児童の道徳振り返りシート等を用いて学習状況や道徳性に係る成長の様子を捉え、適切な評価と指導を重ねることにより児童の自尊感情を高める。		A	必要に応じて家庭と連携して取組んだ	C	自分75%以上、友達85%以上	B	B									
		B	日常的に個に応じた指導を行った					D	自分75%未満、友達85%未満							
		C	振り返りを活用して取組んだ													
		D	十分な取組ができなかった													

3 体 （ 健 康 ・ 体 力 ）	体を動かして遊んだり運動したりすることは楽しい児童を90%以上とする。	休み時間の外遊びの奨励と体育館の開放、体力向上月間（6月、10月、2月）の実施。	A年間をとおして動く楽しさを味わわせる工夫をした	A児童の肯定的評価90%以上かつ「とても」が75%以上	B	B	B	A	全校93.1%（低学年96.2%、中学年93.1%、高学年88.6%）、「とても」76.5% 6年生91.4%であり、運動会で表現運動のテーマや動きを自分たちで考え、教えあって作り上げた経験が、体育学習や日頃の運動遊びにつながっていると考える。	児童が自ら考えかわりながら学習する方法を大切に。体育学習について、より一層教科担任制を生かしたものとるように、体育学習の研究を進める。	A6 B1	・体を動かして遊んだり運動したりすることは仲間と遊びを考えるので脳の発達にも良いと思う。 ・休み時間はできるだけ外遊びができたらと思う。 ・体育学習のさらなる指導力向上を図ってほしい。できる限り個の体力に応じた指導に取り組んでほしい。						
			B休み時間の取組を行った	B児童の肯定的評価90%以上														
			C体力向上月間に重点的に指導した	B児童の肯定的評価85%以上														
			D十分な取組ができなかった	D児童の肯定的評価80%以上														
	健康に気を付けて、元気に生活している児童を95%以上とする。	心と体の関係についての体験的学習の充実（保健・心と体）	A年間をとおして体験学習を適宜行った	A児童の肯定的評価95%以上	C	B							B	B	全校94.6% SC週2日、相談員週2日の勤務により、児童が必要と感じたときに話せる環境があることは大金効果がある。心と体のつながり、心と体の健康について校長講話を行い、全校に安全安心な生活の創造を意識させた。	保健の学習内容について、全校で再確認する。生活指導上の課題について、①特別支援②不登校③いじめ④規律の教員4グループを編成し、取組を重点化させる。「ぜんぜん」の14人について、個別の支援を行う。	A4 B3 C1	・スクールカウンセラーと心の教室相談員で週4日の体制は児童にとって良い。 ・不登校の子供たちの居場所が学校の外にも中にもいろいろあってほしい。 ・コロナ禍でずっと健康に気をつけてきた子供たちの身体と心のケアをしていただきたい。
			B心と体の関係について指導した	B児童の肯定的評価90%以上														
			Cねらいに沿った体ほぐしの運動を実施した	C児童の肯定的評価85%以上														
			D体験的学習ができなかった	D児童の肯定的評価80%以上														
		スクールカウンセラー・心の教室相談員との連携、生活指導の情報共有と個に応じた統一した支援を行う。	A全体で統一した支援となるよう取組んだ	C児童の肯定的評価85%以上	B	B	B'	B'	●安全に気を付けている96.8%、保護者から見た子供の様子91.8%、取組についての保護者評価は92.3%であった。 ●話すことができる73.2%（低学年77.5%、中学年67.8%、高学年74.3%）話してくれるという保護者79.1%であった。	今後も安全に関する学習や体験活動を継続するとともに、保護者と一緒に学習形態や体験を計画していく。SCによる5年生面談の取組を生かし、全児童が教職員の誰かに話してみようという体験活動を行う。ソーシャルスキルトレーニングで、話を聞いてもらえてうれしい、また、そう感じてもらえる聞き方を体験させる。	A3 B5	・SOSが口に出せるようになるのは大変だと思う。そのサインをまわりで見付けてほしい。学校の指導にも限界があると思う。ぜひ家庭と連携してほしい。 ・子供の安全は学校、家庭、地域が協力して守っていきたい。学校にお任せではなく、保護者も一緒にという取組をとおして、保護者の子供の安全を守るという意識をさらに高めていきたい。 ・中学年の面談も効果が期待できると思う。 ・交通安全教室、セーフティ教室、防災体験学習など引き続き実施してほしい。						
			BSC等とも共有して取組んだ	C児童の肯定的評価85%以上														
			C学年・生活指導で共有して取組んだ	D児童の肯定的評価80%以上														
			D適切に情報共有できなかった															
安全に気を付けて生活している児童を95%以上、困ったことや悩みがあったらだれかに話したり相談したりできる児童を80以上とする。	交通安全教室（4月）、セーフティ教室（12月）の実施と学年に応じた指導。	A年間をとおして適切に指導した		B	A	B'							B'					
		B学年で共有化した指導を行った	A安全に気を付けて95%以上相談できる80%以上															
		C学校安全計画に基づく指導を実施した	A'安全に気を付けて95%以上相談できる75%以上															
		D学校安全計画に基づく指導ができなかった	B安全に気を付けて90%以上相談できる75%以上															
	SOSの出し方に関する教育を全学年で発達段階に応じて系統的に実施（特に長期休業日前）	A年間をとおして重ねて指導した	B安全に気を付けて90%以上相談できる75%以上	B	A													
		B重点時期に確実に指導した	C安全に気を付けて90%以上相談できる65%以上				C	B										
		C具体的なSOSの出し方を指導した	B'安全に気を付けて90%以上相談できる70%以上						B	B								
		D適切に指導できなかった	C'安全に気を付けて85%以上相談できる65%以上															
	情報モラルについて外部機関を活用するなど全学年で生活に生きる指導を実施（7月）	A年間をとおして適切に指導した	C安全に気を付けて90%以上相談できる65%以上	C	B													
		B学年で共有化した指導を行った	C'安全に気を付けて85%以上相談できる65%以上				B	B										
		C外部機関や資料を使って指導した	D安全に気を付けて85%未満相談できる65%未満															
		D有効な指導ができなかった																
系統的な防災体験学習の実施と家庭への啓蒙による日常的な行動の習得（9月の土曜授業公開日に実施）	A年間をとおして適切に指導した		B	B														
	B学習内容を家庭と共有した																	
	C体験学習で効果的に指導できた																	
	D有効な指導ができなかった																	
4 働 き 方	時間外勤務の上限について月45時間、年間360時間とする。	庶務事務システムを活用し業務量の適切な管理を図り、各自が自己の月ごとの勤務時間を把握し、次月の計画・改善に生かす。	A月途中で総計を確認しながら勤務した	A年360時間以下の教職員が90%	C	C	B	C	1/14時点360h以上は14人/43人である。	欠員を解消することが必要である。	A5 C3	・働く環境がより良くなることを願います。 ・人材の確保ができることを願います。						
			B前月の結果を次月に生かした	B年360時間以下の教職員が70%														
			C早く退勤する日を決めて勤務した	C年360時間以下の教職員が50%														
			D十分な取組ができなかった	D年360時間以下の教職員が30%														
5 連 携	教科指導において発達段階や学びの連続性を踏まえた意図的・計画的な指導を構築する。	連携小学校間で教科の1単位時間での学習の進め方やノート指導等について改善し共有、実践することによって児童が中学での学習にスムーズに取り組めるようにする。	A小学2校で協議検討した	A複数教科で統一したものを作成できた	D	A	D	C	12月の小中連携教育協議会で、二中校区の校長・副校長を集め、連携の考え方や今後の方向性・進め方をレクチャーした。	分科会での情報交換と課題整理、目標を設定した。今後、取組を進める。	A4 B2 C1	・二中校区での連携が深まり、不安や困りごとがなくなり安心して中学へ進めるようになってほしい。 ・これからも三校での話し合いをしてほしい。						
			B小学2校で取組む体制を確立した	B一教科で統一したものを作成できた														
			C自校で改善に向けた具体を検討した	C改善に向けて共通理解ができた														
			D十分な取組ができなかった	D十分な取組とならなかった														